

機関番号：32510

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21720150

研究課題名 (和文) パラグアイ全国スペイン語地図の作成と言語変化の分析

研究課題名 (英文) The Linguistic Cartography of the Paraguayan Spanish and Analysis of Linguistic Change

研究代表者

青砥 清一 (SEIICHI AOTO)

神田外語大学・外国語学部・講師

研究者番号：00453473

研究成果の概要 (和文)：本研究では、パラグアイ国チャコ地方のコンセプション市とフィラデルフィア市において、58 の語彙項目、ならびにレ代用法 (Leísmo)、ボス法 (Voseo)、アスペクト迂言形などの形態統語論的バリエーションに関する質問票調査を実施した。そのうえで、同国におけるスペイン語の語彙的・形態統語論的バリエーションに関する全国言語地図を作成し、言語変化の内的および外的な動機付けを探究した。言語地図は電子化し、ウェブページにおいて公開した (<http://www.geocities.jp/pedro1aoto/index.html>)。

研究成果の概要 (英文)：In this study, I realized a fieldwork at the Cities of Concepción and Filadelfia of the Chaco region, Paraguay, about 58 lexical entries and morph-syntactic variations such as leísmo, voseo, verbal periphrasis, etc., in order to make a National Linguistic Map and to investigate the internal and external motivations for linguistic change. The map was digitized and made available to the public through my website: <http://www.geocities.jp/pedro1aoto/index.html>.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
年度	400,000	120,000	520,000
年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総計	500,000	150,000	650,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：スペイン語学、パラグアイ、バリエーション、言語地図、言語変化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 2001年、アルバル (Manuel Alvar) の言語地図『パラグアイにおけるスペイン語：研究、アンケート、テキスト』が刊行されたものの、パラグアイのスペイン語バリエーションに関する研究はまだ端緒についたばかり

りと言える。上記 Alvar (2001) はパラグアイ全国を網羅する大型研究プロジェクトであるが、調査手法上の問題が指摘される。それは、各調査地点における情報提供者が1名に限られ、その年齢や社会階層が一定していない点である。パラグアイは、とりわけ西部

地方において先住民語＝グアラニー語を第一言語として日常的に使用し、スペイン語は第二言語として公的場面（役所や学校）でのみ話す人が多い。また、近年の就学率の向上とマスメディアの発達によって、若年層を中心に標準スペイン語が普及している。このような言語背景を有する同国において言語調査を行うにあたっては、選定する情報提供者の「年齢」および「社会階層」に一定の基準を設け、さらには提供される言語情報が当該地点で一般に流布するものとして十分信頼できるだけの「サンプル数」を確保することが重要である。さもなければ、特定の世代や社会階層でのみ見られる変異を言語地図に記載するおそれがある。

(2) 青砥 (2007) は、調査対象地域をスペイン語母語話者の多いパラグアイ東部地方に限定し、言語地図を作成した。各地の情報提供者を選定するにあたり、研究計画・方法に厳密な基準を設けた。このことで、Alvar (2001) よりも精度の高い分布図を得ることができたと考える。しかし、時間的・資金的制約があり、調査対象地域をスペイン語母語話者の多い東部地方に限定せざるを得なかった。

(3) 本研究では、未踏査の「西部地方」を調査対象地域に定め、前述の東部地図と統合し、「全国スペイン語地図」を作成する。パラグアイ西部地方では、東部地方を対象とした青砥 (2007) と同じ内容と手法に基づき現地調査を行い、両地方間の相違点を明らかにする。チャコと呼ばれる未開発の湿地帯である西部地方は、全域的にスペイン語よりもグアラニー語のほうが優勢である。それゆえ、同地方のスペイン語はその先住民語の影響が注目される。

## 2. 研究の目的

(1) 南米パラグアイにおけるスペイン語の形態統語論的・語彙論的バリエーションの全国言語地図を作成し、その言語地図をもとに地域区画や言語変化の動機を分析する。

(2) 語彙面ではグアラニー語からの借用が問題となる。形態統語論的側面に関しては、ボス法、ならびにレ代用法の分布およびグアラニー語目的格人称代名詞 *chupe* の影響が最大の関心事となる。

(3) 今まで憶測や偏見を含みつつ取り上げられることの多かった、パラグアイのスペイン語に対するグアラニー語の影響を検証するとともに、ボリビアとアルゼンチンを分断していたスペイン語地図の空白地帯を埋める。

## 3. 研究の方法

### (1) 現地調査

調査地：Filadelfia 市および Concepción 市

(a) 研究代表者自身が情報提供者と一人ずつ面接し、質問票調査を行う。

(b) 情報提供者は、第一言語としてスペイン語を日常的に使用する都市部の中・上流階層を対象に、18～39 歳ならびに 40～80 歳からなる 2 つの年齢層から男女 2 名ずつ、一地点につき計 4 名を選ぶ。

(c) 調査項目は、中南米スペイン語に共通する研究課題とともに、グアラニー語の影響という地域固有のテーマが含まれる。一人当たり 2 時間程度で回答できる範囲内で設定する。

(d) 語彙論的変異に関しては、形態統語論的項目のように広域的視点から観察しなくとも、比較的狭い空間内で差異が出やすいため、パラグアイ国内に限定する形で言語地図を作成する。

#### 語彙項目

【衣服】ジャケット、セーター、コート、T シャツ、リボン、イヤリング、他

【食事】ポップコーン、ピーナッツ、コースター、フライパン、鍋、冷蔵庫、ほ乳瓶、他

【住宅】居間、寝室、テーブル、ベッドカバー、ブランケット、洗濯バサミ、芝刈り機、他

【交通】バス、ナンバープレート、ウィンカー、歩道、スピードバンプ、ガソリンスタンド、他

【文具】ペン、ボールペン、輪ゴム、ホチキス

【遊具】プール、水着、凧、マンガ

【その他】棺、田舎者、ショーウィンドウ  
(全 58 項目)

(e) 形態統語論的変異に関しては、ある程度規模の大きな地理空間において差異が現れるため、言語地図はパラグアイ国内に限らず、スペイン語圏のほぼ全域（スペイン、カナリア諸島、中南米）を含む形で作成し、広域的視点からの比較・検証を行う。なお、パラグアイ以外の言語地理データは Varilex 研究プロジェクトを参照する。とりわけ、パラグアイに強い分布を有する「レ代用法」については、グアラニー語の影響やスペイン系移民の出身地（スペイン北西部がこの現象の発祥地とされる）など、地域特有の言語的・社会的事情を考慮に入れる必要がある。

#### 形態統語論的項目

\* 文法的性と数による語形変化

\* ボス法 (voseo)

- \*レ代用法 (leísmo)
- \*複合完了過去形の近接過去用法
- \*接続法過去 ra 形と se 形
- \*無変化動詞 haber の人称動詞化
- \*現在分詞の名詞・形容詞的用法
- \*未来形に代わる動詞迂言形 ir a+不定詞
- \*テンス・アスペクト迂言形
- \*前置詞 por の用法におけるグアラニー語の影響

## (2) 言語地図の作成

国立国語研究所の Language Mapping System (LMS) を使用する。LMS は同研究所がウェブ公開する言語地図自動作成システムであり、アドビ社のアプリケーション Illustrator 上で作動する。このシステムの利点は、手作業よりも迅速に地図を作成できるだけでなく、コンピュータ上で複数の地図を一枚の地図に重ね合わせることが容易であるため、別々の地図を並列しただけでは察知することの難しい両地図間の関連性を視覚的に読み取ることが可能となる。

## (3) 研究成果発表

作成した言語地図は『パラグアイ全国スペイン語地図』として印刷製本する。また、PDF ファイルとして電子化し、ウェブページにて公開する。

## 4. 研究成果

(1) 平成 21 年 8 月にチャコ地方のコンセプション市およびフィラデルフィア市において実施した現地調査に基づきパラグアイ全国の言語地図を作成し、同地方において不足する語彙バリエーションに関する基礎研究データを提供することに貢献した。

(2) 言語地図は、各語彙項目につき解説を加えた上で、調査報告書を執筆・編纂し、併せて、言語地図の電子化を実現し、独自のウェブページにおいて公開した。

語彙バリエーションについては、主な語彙供給源はカスティーリャ語（現在の標準スペイン語）であるが、それを除くヨーロッパ諸語では、ポルトガル語、イタリア語、フランス語などである。アメリカ先住民諸語では、地元のグアラニー語とアンデス地方のケチュア語などが有力な供給言語である。語彙変種を形態論的に分類すると、縮小辞の派生 (caña > canilla 「タップ」)、合成 (portar+seno > portaseno 「ブラジャー」)、脱落 (calzoncillo anatómico > anatómico 「ブリーフ」) などが見られた。

意味の変種は、語彙本来の意味が「メタファー」や「メトミニー」を動機として変化したものである。メタファーとは、類似性の連

鎖が原因で、異なる意味領域間に起こるイメージの写像である。例えば、「ロバの背中」を表わす lomo de burro は、その形状によるメタファーで、全く異なる意味領域（道路関連）に属する「スピードバンプ」の意味に拡張した。メトミニーとは、隣接性の連想に基づく意味の拡張である。事例としては、「ペン先」（部分）を意味する lapicera が「ペン」（全体）を指示したり、championess (製造者) が「運動靴」（製品）を表わす場合、さらには材料の chapa 「薄板」（材料）が「自動車登録番号」（内容）を示すケースなどが挙げられる。語彙バリエーションに見られた意味拡張は、メトミニーに動機付けられる場合が多かった。

一般的に地域変種は社会的に下位に置かれる。本研究のように中流階層以上の言語使用状況を調査した場合、文語体における地域変種の分布は標準変種よりも劣ることが予想された。確かに、文語では標準形、口語では異形が優勢となる語彙項目が、54 項目中 9 項目 (17%) 見られた。しかし、調査した語彙項目の中で最も多く見られた異形は、文語・口語の文体差がほとんどなく、標準形よりも地域分布が勝るタイプであり、21 例 (39%) に達した。異形と標準形の間に地理的分布差も文体差もほとんどなく、ほぼ自由に変異すると見られる語彙項目が 7 例 (13%) あった。最後に、異形が分布を独占する項目は少なく、わずか 5 例 (9%) のみである。研究対象の語彙項目のうち八割程度において異形と標準形の双方が共存し、位相の高い異形と低い異形の割合はおおよそ半々である。このように、パラグアイでは地域変種が必ずしも口語や俗語に属するものではなく、教養層によって用いられるものも少なくない。

標準変種と地域変種が共存する要因としては、言語表現のバリエーションを豊かにしたいという人々の伝達欲求が根本にある。その欲求に補助する社会的要因には、近年のマスメディアの発達が挙げられる。スペインやメキシコなどのスペイン語放送が全国に普及し、それらの国々で広く使われる語彙変種が若年層を中心に浸透する。メディアに限らず、経済全体のグローバル化によって、パラグアイ人も国際的な標準スペイン語を習得する必要があるため、義務教育の国語科においてスペインの標準語が指導されている。一方、地域変種の生き残りにとっても有利な社会状況がある。パラグアイはメルコスル (MERCOSUR) 地域経済圏の参加国であるため、二次製品を近隣加盟国からの輸入に大きく依存する。商品流通の動向は語形の伝播とある程度連動するため、日用品に関する語彙項目については、ラプラタ変種の勢力が標準変種に対抗できる状況にある。このように、パラグアイにおける標準形と地域変種の共存

状態は、言語内外の様々な事情が反映している。

(3) 形態統語論的バリエーションの機能変種に関する地域分布を記述した。とりわけ、下記のとおり、レ代用法、ボス法、移動動詞 IR のアスペクト迂言形などの形態統語論的バリエーションの地域分布および言語変化の動機付けについて分析した。

(a) レ代用法について、アメリカスペイン語では稀な現象である。それだけにパラグアイの局地性が際立つ。この現象の発祥地であるスペイン北西部では、間接目的格代名詞 *le* は基本的に男性単数のみを照応するが、パラグアイでは男性・女性の単数・複数を指し、さらに人からモノにまで指示対象が拡張しつつある。口語体における勢力はいまや本場スペインを凌ぐともいえることが分かった。

さらに、パラグアイにおいて収集した口語体資料からレイスモ（レ代用法）の事例を採取し、その統語的環境を考察した。レイスモがパラグアイの口語スペイン語において一般化しているとはいえ、標準語法の対格も共存しており、必ずしも一律かつ無条件に現れるわけではない。レイスモと相性の良い統語的環境の存在が想定される。

間接目的格三人称代名詞には以下に列挙する性質がある。

(i) 指示対象が発話現場とは異なる談話空間に属する。あるいは相手との距離を置くように、婉曲的に聞き手を敬称する。

(ii) 動詞の示す動作の効用を対格を通じて二次的に受ける付加的な文要素であり、動作主からの働きかけが対格よりも弱い。

(iii) 文法的性を持たず、生物的な性を弁別しないという点において、対格と比べて意味的構成要素を欠く。

(iv) 単数形によって複数名詞を照応するという単純化現象に見られるように、文法的性のみならず、元来備わっていた数の概念をも失いつつある。

すなわち間接目的格三人称代名詞は、統語法上のみならず意味論的にも自立性が低く、文脈依存度の高い指示形式である。このような特性があるため、レイスモは照応する直接目的語と重複的に共起しても情報量の過剰を調整し、仮定的な談話空間において実在の確定しない対象をぼんやりと指示するのに適する。つまり、接語重複、ならびに疑問詞、関係代名詞、接続法、未来時制、推量表現などを含む構文との相性が良い。したがって、対格と与格の揺れは、話し手の気まぐれなどによる自由変異ではなく、意味の解釈の違いと結びつく。

本論ではさらに、レイスモに対するグアラニー語の影響について話題にした。レイス

モが周辺地域からの標準語法の波を被ることなく局地的に口語法として一般化したのは、先住民言語との接触が背景にあると考える。その理由として次の4点を挙げた。

①グアラニー語とスペイン語が日常会話において混交する。

②グアラニー語もレイスモも使用場面が基本的に日常会話である。

③グアラニー語とレイスモの地理的分布が概ね一致する。

④グアラニー語に文法的性がなく、スペイン語の間接目的格三人称代名詞にも文法的性の区別がない。

(b) ボス法について、使用場面および年代差などについてアンケート調査を行い、使用の現状を記録した。ボス法は、パラグアイにおいても口語体で一般的である。*vos* は親類・友人、知人か否かを問わず同等・目下の者に対して用いる。目上の人には敬称の *usted* を用いる。標準語法のトゥ法 (*tuteo*) は書き言葉である。会話では目下の人に対して使うが、*vos* に比べて冷淡な印象を与える。ボス法の定着度の指標となる動詞ボス法は、パラグアイでは一般的である。

(c) 移動動詞 IR 「行く」の構文《*ir + inf.*》《*ir + ger.*》《*ir-y-verbo*》》に関して、スペイン語圏における機能変種の地域分布を考察し、意味拡張の様相の分析に基づき、顕在的・潜在的性質を探求し、動詞 IR の概念構造を新たに提案した。

IR 迂言形は、未来時制や継続相に関するテンス・アスペクト論として議論されてきたが、本論では、〈驚嘆〉・〈皮肉〉・〈恐怖〉などの情意、並びに〈困難〉に向けて努力する意思等の周辺的なニュアンスに着目した。IR の中心的意味は目的地への移動行為であり、それゆえ、IR 迂言形は「目的地-未来」「経路-継続」の関係に見られるように、空間と時間のメタファーから派生した構文として捉えられてきた。

本論ではそのような意味拡張の動機付けに加え、移動行為に伴う認知活動、つまり移動のメトニミーとして、動作主が目的地に向けて視界を「焦点化」する心的現象を仮定した。この認知活動のイメージが写像された IR 構文が主動詞の指示内容を焦点化することによって、その内容が心理的に際立つ事態であることを標示し、その心理的際立ちをもって、発話の脈絡に沿う話者の感情が伝達されると分析した。

このように、言語中心地の標準語法のみならず、地域の周辺の用法にまで研究領域を広げることによって、語彙の持つ概念構造の全体像が一層深く理解できることを主張した。

(4) 言語変化の動機付けとして、言語内の要因と言語外的要因に分けられる。

<言語内的要因>

・類推

「多勢の型が心理的圧力となり、少数側が引き寄せられ、変化が起こる」

aji「唐辛子」の複数形 ajies に対する異形 ajises は、一般的な複数派生 (anises 等) からの類推により生まれた。

・頻度

「言語変化は頻度の高い型ほど波及しやすい」

無変化の存在動詞の過去形 (未完了 había, 完了 hubo) が「人称動詞化」する現象 (habían, hubieron) は、特に未完了過去形の方が進んでいることから、より頻度の高い同音異義の助動詞 (habían amado) からの類推が働いているのではないかと推測した。一方の助動詞 haber の完了過去形 (直前過去形 hubo amado) は、古風な文語体であり、現代語においてほとんど現れない。つまり、未完了過去形の頻度の高さが言語変化を一層推進する要因になっているものと考えられる。

・簡略化傾向

「言語は例外を廃し、表現手段を簡略化する経済性を持つ」

冠詞・名詞・形容詞における文法性の呼応においてその傾向が見られた。語頭 a- にアクセントを置く女性名詞は、中世スペイン語の定冠詞女性形 *ela* がこのタイプの名詞の前で *el* という語形であったことから、現代語でも定冠詞には男性形 *el* をとる (*el hambre*)。修飾する形容詞は規範的に女性形であり、定冠詞の男性形とは文法性が一致しない (*el hambre inesperada*)。ところが、規範的には女性形になるはずの形容詞が、定冠詞に合わせて男性形になる (*el hambre inesperado*)。この現象は二つの修飾辞の性を共通の形に合わせる簡略化によるものと思われる。

・直示化傾向

「漠然とした指示形式は、直接的に指示できる形式に替わる」

再帰動詞の目的語や所在・移動動詞の補語は、それぞれ定冠詞付き名詞句 (*me lavo la cara* 「私は顔を洗う」)、裸名詞を伴う前置詞句 (*estoy en casa* 「私は家にいる」) であるが、より直示的な指示形容詞による修飾 (*mi cara, en mi casa*) が好まれる。

・体系的補完

「文法体系は、一つの形式が欠如すると、別の形式で空き間を補充する」

スペインにおいて発達した複合完了過去形

による近接過去時制 (*han venido hoy* 「今日来た」) はアメリカに伝播しなかったが、ラプラタ地方では副詞の地域変種 *recién* が単純完了過去形と共起し (*recién vinieron hoy*)、時制体系における近接過去の空き間を補充する。

・潜在的祖語特性

「祖語の持つ機能が子孫の現代語において失われたが、地域変種として復活する」  
ラテン語現在分詞の名詞的・形容詞的用法は現代スペイン語の標準語法に継承されなかったが、祖語の体系が潜在的に現代語に継承され、パラグアイの地域変種として再現している。

<言語外的要因>

・言語接触

「系統の異なる言語同士が接触した結果、一方の言語形式が持つ機能を他方の言語形式によって借用する」

スペイン語とグアラニー語のバイリンガルが一般化しているパラグアイにおいて、スペイン語前置詞 *por* がグアラニー語後置詞 *rehe* の持つ統語的性質を借用した。

・言語中心地との地政学的関係

「言語中心地から遠距離にある周辺地は、中心地からの改新の伝播が遅い」

ラプラタ副王領はスペイン王国から地理的に最も遠く、支配力が弱かったため、本国からの言語変化の伝播が遅かった。ボス法は、アメリカ植民地の主要都市であったメキシコ市やリマ市から離れた地域 (ラプラタ、メキシコ南部・中米など) に残存している。

さらにパラグアイは、ラプラタ副王領の辺境に位置した域内中心地ブエノスアイレスより遅れてスペインからの改新波を受けていた。スペインからの独立後、長期の独裁政権下 (Dr. Francia, C.A. López, F.S. López 等) において近隣諸国との交流が停滞し、パラグアイは陸の孤島と化した。そのため、スペイン北西部出身の移民から広まったレ代用法は、周辺地域の影響を受けずに、中南米としては珍しく一般化している。

・言語アイデンティティー

「言語が地域社会の独自性を象徴する」

パラグアイの場合、グアラニー語がアメリカにおける独自性を示す文化財として憲法にも規定されている。スペイン語についても、ボス法がアルゼンチンを中心とするラプラタ地方において特徴的な変種として愛顧されている。口語スペイン語 (特に下流階層) には、文化的象徴であるグアラニー語からの影響を受けた音韻と語彙の変種がある。

・学校教育

「学校で指導される文法が社会規範となる」国語科 (castellano) のテキストには、国際語としての標準スペイン語を習得するため、現代スペイン文学の作品が収録され、その言葉が教養語として用いられる。例えば、アメリカの口語スペイン語では勢力の弱い未来形は、教養層の日常会話に頻出する。アメリカでは普及していない複合過去完了形の近接過去用法は、教養文学に限って現れる。また、話し言葉ではボス法が一般的であるが、書き言葉は標準語のトゥ法に従う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

青砥清一、「パラグアイにおけるレイスモについて」、『神田外語大学紀要』、査読無、第 22 号、2010 年、pp. 53-72.

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 1 件)

青砥清一、『パラグアイ全国スペイン語地図の作成と言語変化の分析』、私家版、2011 年.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<http://www.geocities.jp/pedro1aoto/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青砥 清一 (AOTO SEIICHI)

研究者番号：00453473

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：